復活の主日　2017.4.16

主の復活

ヨハネ福音書 20:1-9

週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

説教

この時期の世間話は桜が話題になることがしばしばあります。うまいことをいうなあ、と感心したのは桜が散ることを心配している人に、さくらは散るのが見どころだと誰かがいっているのを聞いたときでした。

わたしたちのイエスさまをさくら花にたとえるのはどうかとも思いますが、イエスさまも散ってこそイエスさまともいえるのだと思いました。

散る花を見るのは淋しく悲しい気分になるのですが、見事に咲き誇っている桜が散るからこそ、美しいのでしょう。咲かなきゃ散れない、当たり前のことです。

イエスさまは見事な公生涯を送られました。それも３年足らずの短い間でし

た。イエスさまは犯してもいない罪状で裁かれ、十字架につけられ殺されました。
しかし、イエスさまにとっては死は終わりではありませんでした。きょうの福音ではからの墓をめぐってこの事実を受け入れることに戸惑う弟子たちの様子が記録されています。
弟子たちは不信と信仰のあいだを揺れ動きながらも、信じることで互いの結びつきを深めていきます。そしてそれぞれに花を開き、そしてそれぞれに散っていったと聖書には記録されています。
さて、わたしは生きているか、わたしは死ぬことがでるのか。当たり前ですが、生きていなくては死ぬことができない。イエスさまは生きて福音を語り、そして死んだ。しかし、死んでおわりのいのちではなかった。それはイエスさまが正真正銘に生きていたからだと思います。桜の花は咲き、そして散ります。わたしたちも生きてそして死んでいきます。復活したイエスさまがわたしちを導き、教えててくださることは、いのちは死んで終わるものではない、だから、あなたたちは復活するいのちを生きよということです。